

書棚の奥から（『論座』2007.5）

簾内敬司（すのうち・けいじ）『涙ぐむ目で踊る』（1997年 影書房）

田中優子

平凡社のPR誌『月刊百科』2006年12月号に、「もうひとつの『春と修羅』——秋田連続児童殺人事件に思う」という文章が載った。筆者は簾内敬司である。「この若い母親が何をしたのは、いまでは誰もが知っているが、何が彼女をそうさせたのかは、いまもって誰も知らない」——それが、この畠山鈴香の児童殺害事件について、彼が書かざるを得なかった理由であった。

簾内敬司は、「限界的集落」という言葉に注目する。限界的集落とは、65歳以上の人口が50%を越え、世帯数が19以下になった集落を言う。限界的集落になると共同体の機能はそこなわれ、地域に踏みとどまりたいと思っても、とどまれなくなる。北秋田では殺人事件の起こった藤里町をはじめ、いくつかがこの限界的集落の問題を抱えていた。

簾内敬司は、自殺率、少子化率、高齢化率をもっとも高く、自己破産件数や生活保護世帯の多い秋田県の現状を書いている。秋田県そのものが「限界的集落」だと指摘する。しかし秋田は日本が向かっている方向を先取りしているわけで、これは日本の将来そのものでもある。にもかかわらず国政は、大都市と地方の格差や、地方の疲弊に注目することはない。簾内敬司は畠山鈴香事件の背後にあるものが、このような、日本の抱える問題なのだ、と言っているのである。

秋田の現状を凝視する簾内敬司は、しかし東京にいて秋田を評論しているのではない。私のように、二ツ井町や藤里町など白神山地の麓の町をこそ「美しい」と思って訪れる、そういう気楽な鼻屑でもない。簾内敬司は、そこに生まれ、そこに暮らし続けているのだ。限界を、限界に踏み止まりつつ見つめ続ける人、なのである。

『涙ぐむ目で踊る』は、その人によって書かれた小説である。「涙ぐむ目」とは、村はずれに住み着いた外国人である李さんが、30年かけて開墾したその土地に作られた、ストーンサークルのことである。主人公である僕と2人の友人は、李さんの花畑の突端に、直径20メートルばかりのストーンサークル状の円形広場を作る。それは遠くから見るとまるで「涙ぐむ目」のようだった。この小説の最後で、区長から土地の「魂入れ」を要請された3人は、この「涙ぐむ目」で鹿（しし）踊りをする。

このように要約しても、すぐには伝わらないはずである。なぜならこの要約の中の

「住み着いた外国人」「30年かけての開墾」「ストーンサークル」「鹿踊り」のいずれもが、北秋田に関わる重要な出来事や歴史だからだ。なぜ主人公の「僕たち」が3人なのかも、偶然や思いつきではない。北秋田の鹿踊りは3人で踊るからである。

この作品の全体像を見渡すには、もう一つの作品が必要だ。1989年に刊行された『千年の夜』（影書房）である。この作品は故・藤田省三が「砂漠の中の一粒の砂金」と絶賛し、簾内敬司の作家活動はここから始まった。『涙ぐむ目で踊る』は、『千年の夜』の第二部として書かれた作品であり、物語はそこから続いている。『千年の夜』では「僕たち」は10歳で、村の山裾の湿地帯に暮らす李に出会う。この作品は一方に李を、もう一方に公子という少女を置いている。李の住んでいる場所は村の入会地なので、大人たちは追い出そうとしている。李を助けているのは公子の母親だけで、彼女は村人から冷ややかに見られている。この作品では、少年たちが李をからかい、公子をいじめる心理を、「影踏み」というかたちで表現している。「いじめ」の原点がここに見える。まず大人たち(あるいは社会)による排除がある。それを象徴的に表現するのが子供の「いじめ」なのだが、彼らは自分たちの行為(ここでは影踏み)が他人に与える痛みが無自覚だ。影を踏まれた公子が「痛い」とつぶやくことで、少年たちはようやく気付く。『千年の夜』は1960年代の高度成長期を背景にしている。公子は東京に出て就職するが、高層ビルから飛び降りて死ぬ。李と公子は、戦後の高度成長社会から排除された人間たちの象徴である。

『涙ぐむ目で踊る』では3人は大人になり、地元で仕事に就いている。頻繁に李のところに通い、花作りを手伝う。ここで、李がなぜ入会地に住み着いたか、推測できるようになる。花岡事件だ。強制連行され、栄養失調状態のなかで鹿島組に過酷な労働をさせられていた中国人たちが、1945年6月30日、一斉に蜂起した。彼らは獅子ヶ森にこもって海に出ようとしていたが、多くは憲兵や地元の自警団によって捕えられた。それまでと合わせ、419人の中国人が亡くなった。これは歴史的事実である。簾内敬司は花岡事件について『獅子ヶ森に降る雨』にも詳しく書いている。李の後ろに、この出来事が見える。

物語の最後、3人はストーンサークル「涙ぐむ目」で踊る。ここがクライマックスだ。「鹿踊りは死者の蘇りの踊り」と僕は語る。3人の行動を不審に思っていた区長も、自ら草鞋(わらじ)を編んで与える。鹿踊りは排除する者とされる者をつなぎ、過去と現代を結びつけ、踊り手は死者とともに踊るのだ。異なる世界を結びつける、死者と出会い生を謳う。これは、踊りや祭や歌や文学が、本来持っていた働きだったのでないだろうか。私はこの最後のくだりになると、何度読んでも、涙があふれて

しまう。

簾内敬司は、今は世界遺産となった白神山地の保全運動に力をそそいでいた時、地元との板挟みになって大きな悲劇（*）を体験している。ものを書くことは「巡礼の旅だ」と語ったそうだが、彼の作品は確かに、「祈り」そのものである。

（*妻が子供を道連れに心中した。これを契機に簾内氏は、経営していた秋田書房をたたみ、しばらくして執筆活動に入る。）